



“ドリームチーム”による和製 Cope 本 —若手向け腹痛本の新しいスタンダード—

評者 志水太郎 獨協医大 主任教授・総合診療医学



すぐ・よく・わかる 急性腹症のトリセツ

高木 篤、真弓俊彦、山中克郎、
岩田充永＝編著

定価：本体 3,800 円＋税
B5 判・192 頁／医学書院／2020
[ISBN978-4-260-03945-1]

Cope をはじめ、あまたある腹痛の書籍における本書の位置づけは何か？「すぐ・よく・わかる」「急性腹症」のタイトルにあるように、腹痛の名著 Cope 『Early Diagnosis of Acute Abdomen』を今時に“超訳”（本書「はじめに」より）された本と言え、本書の伝えたいメッセージは明確ではないだろうか。Cope の名著は病歴聴取・身体診察の腹痛の標準テキストとして長らく有名であり、評者も学生時代愛読したが、その輝きは 10 数年たった今でも衰えず、「腹痛の本で何を読むべきか」という質問に対する推薦 3 冊のうちに必ず入る本である。研修医教育などのリファレンスは、結局 Cope 先生の本に戻るが多い。

その一方、Cope が比較的難解であるという欠点(?)は、本書でも指摘されるとおりである。本書は、その欠点を補いつつ、さらに日本の現場感覚を反映した、まさに日本の読者のための“和製 Cope”と言えるつくりの本である。

「どこまで知っているか」より「どう考えればよいか」

本書は実用性が高く、またそのなかに“臨床の魂”が注入されていると評者は感じる。なぜなら、第 1～3 章から順に「Why」「What」「How」を記載された明快な章立てで誰が見てもわかりやすく、現場でも求めるページを迅速に開くことができる実用的な構成に加え、腹部触診や CT 読影の際に体腔内を直観的に頭の中で映像化・想起しやすい具体的なシエマが多いこと（こういう本がなかなかない!）、そして How にあたる第 3 章では、小項目のタイトルを読むだけでも腹痛のピットフォールが網羅できるような直言のメッセージにあふれ、速読で全体像を俯瞰することができるという実用性を意識したつくりになっているからである。特に How の第 3 章は必読だ。

これからの医師に必要なのは、「どこまで知っているか」よりは、「どう考えればよいか」である。知識をどこまでも広げることは、検索方法さえ心得れば万人が同じスタートラインに立てる。しかし、「どう考え、どう行動できるか」は医師個人の生き方・考え方と実地経験の結晶化であり、ここに医師のプロとしての expertise や art がある。本書の著者である腹痛診療の達人の先生方のエッセンスを学ぶうえで、この How の章は本書において特に外せない。そして、その前を担う第 1～2 章においても、そのエッセンスは行き渡っていると感じる。

本書のさらなる魅力として、著者の先生方のお人柄を表すかのような作りも垣間見える。たとえば、各項目の合間に内挿される“臨床短歌”などはウィットに富み、現場を知る人間にとってはほほえましいものが多い（「してません絶対絶対してません してませんけど妊反陽性」p.155 など）。

本書は、日本の総合救急・外科救急・消化器診療を代表する先生方が、まさに“ドリームチーム”による強い絆（4 名の先生方が大学の同級生・また職場の同窓でいらしたことに驚きました）でつくり上げた後輩への腹痛学習の総決算、とも言えるだろう。